西山物語評釋

序文

惣論上

首

玉小櫛曰

此人の[illegible]

[illegible]

恒雄曰

[illegible]

佳孝曰

[illegible]

明治五年十月

竹田佳孝しるす

玉小櫛曰

此人のやうなるこそ さとはすきものゝ女御にもさらんとおもひし

源氏の君に給ふ御事を此人のやうてあるにはし給ひて源氏の御事とおもひ給ふ 細ハ此歌をきこえて

されは人のやうなるとはさる人の源氏の御事とおもひ給ふ人のあらたなる

けしきの給ふ 神無月の比おひ月面白かりし夜

うち源氏の御事を なにかしなりしもの

おもはえさる

すきたる源氏の 過ぎてもある人あまたひきつる事に心ひかれて

何ごとする時ハ下に 御心ハ大納言の為にもありやまらんとすなりし

おもしろくおもほえて

せうとやかなると思ひ 此人のやうなるや今香人まつらんやなかんへうやしう

すき心ある事を思ひ

つかさのなかに此女の 此女の家にとまりきこえたりけれハ

ひたる人にとんで いへしきさそ

ちるをおもひ

これハおもひ疑ひて あはれなるさまれより 此のあるしみえて月をかし

もいひす

源氏の御事にてハいそ 廊まするすみをきこえん とこそいひて おり給ふへし

と思ひ給ふ下にあり

おもし 己もおもふ

源氏の御こゝろいれてその下にみな様におもしろく思ひ給へる句のなるをきこえたると

行く先の御心にて源氏の御事にてハうつくしくする時の御事にてこそハ下の

おり給ふこそかくてれる御事あり 源氏の君にてこゝろひく事よりおもしろきあり

さりハ此頃ハさすかにて下へうつしてんなへ 玉小櫛の説

細雄曰 神無月の比おひ(?)とある此人のやうなるにかきたてハ此頃の心を

其事のやうなるにて今香人まつらん所をかく心ひきしきことゝ

いふと源氏の御歌 なれハおもひみる月のけしき こゝろん

くるしきことゝいふ御事を一ツにつけてる頃の御心と又所々の説あり

此人のやう様とあるハ此の説をさし給ふとも説きたてゝたえて何の

下ようにもおもしろきおもひハさりとて此さしとおもひ給ふ

おもひたる事をさためたるてきこえたれハとそのしたにこそかなへきにいらす

此女の家にまるといふのこゝろのうちにも月をやうすみをとよそに

人それもさするにてる所おもはなるうしろはへこゝろおもしろく

かくにてこのいさめの説ありそといふもいらす

行事ようおもひたる事をこそにてかくたる歌のやうといふとおもひて

いかんせんをはおもひ ようなくらうちのこゝろのなれハいふす

○きゝ平の事ともをこゝろえては源氏の(?)とくしきよしなり

[illegible]

曙文庫
彼樂雅書

あらて昔人乃こゝろ様こそ
つゝりおきるすもあるしよる
ゆゝ敷事ゝは言葉をもて
なの世に工匠とものよ鋸ゝまて
力をゝ授て作りなせる長押様

ゝ八闕かゝとゝ出ゝ八陽ゝ
世ゝ人ゝそゝいゝりゝゝ社大夏
社ゝゝゝゝ陽ゝ光ゝ世ゝ八ゝ
にてかの四町をしゝ光ゝ世ゝ様ゝ
土ゝゝまゝゝ形ゝあゝ世ゝ八ゝ世ゝ

先は便なる所の例こなるべしと
はしるに思ひ出ぬ程に
こゝ矢通といまのうつるべく
中もあるべき事なるべうかる
すまじもとと思ひ給へ

以ゝ為大学の君ふかゝるべきの
ゆゑいかゝ[illegible]つゝ[illegible]廣道う
[illegible]に繩墨を正しうせ
[illegible]事くひめして
初府のあとゆゑ[illegible]の

大体ふかゝるべき

久貝因幡守正典朝臣

坂善堂主人

むかし此物語ふみの今世にのこれるもの
こゝ迄うれおほくの年にこの原氏物語ほど
ちゝめてゝ見たいあまきことたよる此物語
人世まのいひ伝へらまくゆなれといふ
も文なるものゝそゝやまとゐはこゝいふ
〳〵へ今ゆくさきもをもくなりゆくかゝ色き
書れさたるもいふ海のようにてこのゝ此

みやひとをよしなんよむよもゆく
うくゝまんゐのちんとなるゐきまこの
物語ゝとまてハいつきわ宮わ世また
去け山の奥に入ち水原此ゝ紀をこゝ
て光ゝまつよわ海のとゝ紀ゝの
なまけうゝぬ此やゝとなゝきの上人
世ちのおゝゝまくいゝ紀ゝるものゝ

いとおかしくそれのうまれつきをあらためもよほしぬ
ゆきかわりて生まれいるまでいみじきものに
きくばかりもうさくともかたるにおよびがたし
抜たなられぬもうわなんにのぼるほどに
ゆくさきのいさかうぬゆのわきつねてあるき
ものもうるものもむとものうたむさ〳〵ぼれ
かまわるべきふくきうへしとそのほど

なのたわしおのきあるまれちかとよわ
このはうるわるいうめてうつうちもち
いのまもまもむとるすれとはつまれあ
ぬよなるまのちうぬ少きむちち
のこせれくいとあもてきおもおほ
うわうはむうよるれちうさくあ
まひく〳〵合をんうるいうわん

なくよなをとなきつるちぬさてなんこの
さいけるあきの月をさそたちのむるもと
まれおもてはるはこのはとれぬもの
からてれをのきてなぬをくふとんをと
はくさをのまれ野かるはさいはく
くれしき所ふおほのわしなにか
はくよみかをふふかのちうさとれ

もれをるるすをふするとをふ技れ
ゆををてるをたるのさふふやちる
ぬのをあるぬるにおほゆをた
さををとをゆふるるるるかをた
ふをるるをんくををれとあるを
ひるるをたるをををるるなし
て板をきんとふいてのぬけなく

はるとはなといひくかいやわつあのうをを
まついとせきてそのうちまてつひよハ
さるひの色ふかくさとけなるすたくる
事とハれるあはてきよの拙淺人さとひ
たてのあることをあしきおろのまる
ひをつかむひまつくものつれれ
きたかかすまをうとハおほうんう

ろまつの中まもさるのあたるのぬるの
ふのうあはせれるえの河ともよ侍
いそおたうろうまるむるるさとひ
云るはれうよすくうつかき
きるれをいとをこ侍のかをりてハ
さるうるまとをもなのく
なのかれうちなんれと

清みさわらぬ物とあるとく
たゝるもまのほりそるをもし物とゝへとも
光り遠ハのわをとくハ書てつるあの花ち
見る人ハ清らるをおもふ事ハてよのしし

嘉永七年正月三日

萩原廣道

校正譯注源氏物語評釋首巻目録

惣論上

一 源氏物語といふ題号の事 一丁
一 紫式部の事并日本紀の御局ハ事 二丁
一 時世のうつりかハれ事 六丁
一 此物語称誉の事 十三丁
一 此物語ハ歌の事 十五丁
一 作者の用意ハ事 十九丁
一 物語ハ心ばへ并物のあはれを知るといふ事 九一丁
一 一部の大事といふ事 九七丁

惣論下

一 此物語注釋どもの事 四十丁

一 引歌の事 四十五丁
一 准據の事 四十六丁
一 巻々の名どもの事 四十八丁
一 人々の名の事 同
一 紀年の事 五十丁
一 系圖の事 五十二丁
一 此物語ふ種々の法則ある事 五十三丁
一 をりをりの考証を書る所の事 六十六丁
一 頭書評釋凡例 六十八丁
一 本文譯注凡例 七十六丁

已上

校正譯注源氏物語評釋首巻

惣論上

源氏物語といふ題号の事

萩原廣道著

源氏物語といふ名の事は本居翁の玉櫛ふに云、大ようかうくの物語の名の例、おりくにさまふ主とていふ人の名をあてたるなり、此物語もそのごとく、光源氏君の事をむねとしてよめる故ふ源氏の物がたりといふなり、さて物語の名、光源氏の物がたりといふべし、きぐ源氏物語といふべきよりいづくといふ人あるまじ、さしてあらぬ日記ふもいづく源氏の物がたりといふをやといふれども、此説のごとし、さて源氏のよは園部翁の源氏新釈ふ云、國史ふ新撰姓氏録ふ依案ずるに、嵯峨天皇弘仁五年ふ皇子ふ信公以下男女八人ふ始て源朝臣の姓氏を賜ふ、左京ふ貴ふ給ふ、皇子ふ氏賜

くるくるまる源氏なり。諸抄に此時三十餘人より始て源氏を賜るといへるは委しからず。
実は初八人まで次々に三十餘人に賜はるべし。といへるごとく源字の事は舊說より
濫觴小水爲九河之源の義に祝して用るゝとあり。まゝ伊藤長胤が秉燭譚に云北魏
の時源賀に始て源姓を給ふ源賀は太魏の皇族にて源を同じうするに因て始て源姓
を賜ふ。源賀の傳にあり。本朝にも源氏は皆皇族より出つ同一義なり。といへり。
かの國史を考るに必ずしも此事にあらずして源賀禿髮傉檀之子也云云太武謂曰卿與
朕同源因事分姓今可爲源氏とのたまへり。さまで此說はいとあるべからず。嵯峨天皇
のゝ時は漢籍をもてさやうに人は委しく議定らまくに北の狄が同源の義
に依るに非るべし。さまでは源氏を賜ふ事ゝのひく皇子の氏に賜へる
例となるは遥俄の御時はじめなるべし。さて拙解といふは
玉に梯に云中むかしのかど拙解といひく一くさのふることはり拙解とは今の世に
さふ一といふことなるべし。日本紀に談といふ字をそなへるが

ゝと訓るゝそを書に名づけく作まるとは綜合考ふ拙解のいで出たるなり
のおやある。件取義ふ法ぐのゝ一ゝぎを合せくとあまたは此件取やちぐ先
なりゝんその拙解ごぶいつの代に法くまりとは考ゝまに神どもいくくふる紀拙と
ん云ぐ延喜などよりはこなるれ拙とぞんゝるゝく。さてもゝ法くの拙解の
さは拙のくすゝづかゝくさまぐくなれども。いづまも考れ世ふるゝをを
かるるよふて。ゆゑはいさゝかもちゐるゝ事をよりどころ。ふてはゝこの
てとう紀あるゝを考をかゝ。ゝめ。ゝへりてかき。あるゝみれぐゝ作りあり。
又まゝてよみゝ事をその事に書るもゝくやゝくゝある中に。まづ考ゝくは
作まるゝのゝ言ゝかくていぢまゝの拙語も男女のゝゝひのゝをむ神と
おゝく出ゝるゝよゝれ。の集せゝふも。京の文れ考きと同じことゝゝふて。
人の情は法ゝかゝるゝと。考よまゝるゝなゝればあり。といまゝゝれぐごとし。

紫式部の事 并日本紀の御局(ミツボネ)の事

紫家七論は源氏物語

○二

古の物語作りまうける人の紫式部あることハみづからかける日記ものこれど、勅撰ものなし。古の作まる小つぼね昔ようさうぐの説どもあれどいづれもこと後よりおもうていへる妄説(ミダリゴト)あることゝ紫家七論源注拾遺玉小櫛などゝ多くいまゝてれどこゝ小省(ハブ)くさるハ妄説(ミダリゴト)とぞ小ふべハ皆無用(イタヅラ)ある論あれバし。さて作りぬゝの系図ハ舊注ども小ろんこゝる中小安藤為章の紫家七論あるハ。はよ委くく考へるものゝ父ハ正四位下越前守藤原爲時朝臣とて閑院左大臣冬嗣公の子贈太政大臣良門公より四世の孫あり。母ハ常陸介藤原爲信朝臣の女夫(ムスメフウフ)ハ左衛門権佐藤原宣孝朝臣とて同じ良門公の五世の孫にて勅使家の祖なり。さて宣孝乾方の北方と称して大貳三位(女子名賢子)と辨局(名不傳)とを産(ウミ)て後長保三年四月小宣孝卒(ミウセ)らまゝ〜ゝ寛弘二年の比より上東門院へ宮づくよ出られるさはあるゝまゝ此物語作

紫式部という呼名

作まるハそのやうめずみのおぼとあるべ足事まゝ萬壽二年の比までハ存生小て上東門院小仕へ〜まゝてゝしまゝ小あるゝなど多くかの七論小いへまゝバひ〜ゝ足ゝく初ゞ〜此人実の名ハ傳ハゝぞ紫式部といふハいとゝある呼名(ヨビナ)なることゝ玉小櫛小いとれるごゝ〜さて紫式部といふ名小つ足ゝく説(トキヲ)ども多うゝ中〜ゝ河海抄小紫のうへの事をすゞれて〜足出るあるゝ藤式部のゝをあ〜ゝあて紫式部と号せ〜れそうとある成七論又源注拾遺などハ玉小櫛ゝハ袋草紙小一條院の伊乳母の子なりゝ〜ゝて上東門院小ものゝ〜むとゝく小ゞ中ゝのもとゝ〜ゝまゝとおゞ〜めせとゝやゝ〜めゝ作ゝ小あるゝ紫名あゝ武蔵守の式部とあゝ成ゝとゝ〜れゝうこの二つをおりつふ小ゝ作のゝまゝまゝるやゝなゝ紫式部日記ゝ左衛門督(公任卿)あれゝ〜こゝまゝのゝゝうゝ小紫やゝあゝ〜ゝとゝうゝぐひゝゝ源氏小ふるべ足人足てゝあゝぬ小かのゝうへハまいていゝゝぐゝりのゝ〜ゝまゝんゝとゝゝめゝあゝゝうゝ。とゝあゝるゝをいゝぞまゝて〜ゝ出て、紫冲為

章ハ、こまでよまれてかの河海説は澄とせられしも紙に撰よハおかりの説によれる時ハ、紫といふ名ハ此紫の上にハあづからぬ事なるをそれとよそへてのちまで其のかずすべてよぶもれならハ、たがはぬことをめづらしくよそへていふを更に其とハもちひなきことし。といへまでかりけり今案にまづ河海よ藤式部をあらためて紫式部と号せしれかりとある八上東門院の号ありけるとハさまる世人の号しるをもちひきたてたゞまでも、まづハ上東門院の号しめへりといふやうにやすかるくかしきるとおもへバ、それハ誤なるべし。大かたこの呼名ハ式部まで侍従少納言などいふ類にて、うつしも姑兄弟かよりて八主よりも紛よべきよかんを、その上に冠せたる紫、和泉などいふ類ハ、皆他より呼わかちたる名と見えたり。此人もそのもとのハ、江侍従清少納言などのごとく、其氏によりて、藤式部といひしと見えまでたゞまで初めちそその呼名なりけるを此物語作り出て後に他より称て紫とハかへられしとぞおぼゆるかりしくハこの

公任卿の紫の事を述べるなどやその始なりけん。よしさりとも他のつけて呼たるが、何となく弘まれるなるべし。又名ハめし紫の上の事をさてぐまて書るにあらずよりて紫といふ名を賜りしバそれ我身やがて紫の上に擬へしまでるがごとしれものなきバかの用ゐられ人ありしバ必辞びなるべき事くまる一條院の御乳母子れ故をもて紫ら名づけるかなりしバ、これハ猶につかしきことなれバ、うちつけ甚く辞びなるべきなり決しでそのうへ帝ハゆかりの者なりとのたまふとも、上東門院のそれをやがて御つぶやかせ使ひなれ女房の名に付たまひ給はんも、いかにしき事なるにまして世人の志ち呼んハ、いともかしこきことなるにまいバ、紫式部といふハいかゞ、さることもさまでハ紫と藤式部とのみいへりしを、後と紫ことあらるもあれバ、ちかくにおひはせて他より紫とハ清けるなるべし。はてそちちあハ其かいつのかれなどにつきたりしも、何となく呼名のやうになりてハ、おのづから藤式部のうへそれて紫とのみいふやうにハなりたるならし。

小櫛ふ〻ゆられ云ひあ〻ぬ事をめづらしくよろこべくいつをとして奥さは
さるまでといきまてるそかとよりさるこゝふまで〻ふれ物より此人ふ紫とふ称
あり〻あ〻ば此物語よ紫上の事をとりとりていみじくハ出べくもあらず。
あ〻まるこゝば家刀やうでそれなぞ〻ふるさとよりやうやうべくまばらされで
枕紫上の事をすぐれていとゞ〻くかまてる為ふ他よりおもしてはいと式部ハ
つけゝわとこそ物ゆるなまに紫上のうハゞあもすぐまてくいみじくかれ
るふこの物語をもとやく紫の物語と更科日記よハんこれハ契沖の説ハ
ごとく呼名のおこりもそまふ因ことハ大くさきゞふまゞくでおぼゆるまさ
袋草紙の一説ふ若紫の巻を後まる甚深ある為よ此名を得ようとあるハ
先まのとゝれざりゝごとく〻ひゞくとなるべゝそもくかゝやくの事ハ今と
なりてハよくもおゝまぬ事あるふこゝふ引出ことわるべき例證もなん
ことあるまでゞ実ハいろあるさはありてんゞその事情をありてかゝるめよ

日本紀の局

いひさゞむるなまばいづまとうまるこゝくあるべん人擇びてとりはし
さてつのでふいまありゝまハかの紫式部日記ふさるもの内侍といふ人侍り
云ゝうちのうへ源氏の物がたり人よりませるひつきこゝ也しるふこの
人ハ日本紀をこそよみ侍べるまこまことふざえあるべゝとのさまも勢
ゐる様ふとおゝこゝろわふいこゝろなんざえ因あると殿上人おどろいひ
ちゝこゝて日本紀の御局ひとゞでたけこゝりゐるいとをこゝくこゝで侍るゝ。
といふことあり。こまこまよつ紀て藤井氏の日本紀御局考といふ物の一巻あり。
其おりの紀ハこの日本紀とあるハ日本後紀續日本後紀をさこゝてのこまんるよし
をいひく書紀より續後紀までの四ふこハ因ゞ名あまばゐるハ国史の事を
日本紀といひつゝんよりを論ひさて源氏君を嵯峨天皇ふ准へるのよう。
次ゝふ学中の人こを学世の人よりひあてこる准據を考ゝく日本紀をよく読さ
るよゝをのこまへるやゝふいそれこゝり。然まゞでも此所の文本ふよりて実因

あるをかの沙局考まで日本紀をこそよみ〻るべき〻まとして記まてるハさる本も有しふやめ〻くハ本ふよ〻こ法へ〻き〻とあるをゑて〻帝より式部を法とハのこまふよ〻ぐ又法へとあめ〻ぐうへふつけくいふ名として〻ハ語格の自他ゑめ〻へまハ誤なりとゑて〻改められるろ〻そハ古〻ねどをよみ〻るべ〻れといひてハざ〻えあるべ〻といふよ〻かけ合ぬ〻ごとし〻るハ既ふ讀る〻ふれハべし

とふをうゆくいへふるゑさ〻又べ〻を推量りる〻さ〻て〻俗言ふざ〻えがアルデアラウといふ名として〻ハ次の詞よおゑ〻ざ〻えのトふ〻ぢ〻ある本ハ行まるるなり と後上人おどふいひちゑ〻て〻とあるよめるをゑ〻ざ〻るハまことふざ〻えあるべ〻とのこまひ〻るをいらでうざ〻えあるといふんハいさ〻ら云のうふきるゑ〻ふく事のすぢハ同じ〻れハさバ〻り半ゑ〻るのふあ〻ぶれハ〻案ふふ法よのぷぢハそへてかぬ〻苔礼例とゑて〻此拠後の古き写本どもふいはゑまても添るハまく形〻されハあ〻くまのぷべ〻き〻とよむべくあ〻ぐ也さて

帝より式部を法ぷとのこまちんこと〻ハ後世まく〻ハありげふもあ〻ぬ事れやうなるまで〻ぞ世ざゑの詞よハさるほども拠後の中ふもこれられ〻こ〻まハ〻れ〻さ〻て物〻べ〻さふもあ〻ぐ〻く言の名を拠人ハ日本紀を読べ〻〻さ〻ぶまこと〻ふ学問あ〻べ〻とのこまへるふて〻ざ〻えハ例の学才ゑふて

今世よ学問といふるあ〻べ〻ハ今ようの後生ゑ〻べ〻とい〻さ〻ま〻べ〻れもべし

も世よ〻まをうけくいふ辞として学ぶべ〻〻そ〻ま〻ゑ古博門内侍のいこ〻ぢう學問ありとのこまへるやうにいひ〻ぢあて〻後上人ゑどふいひちゑ〻てかるあ〻ぐ名法けるをんうゑ〻こと〻ふやひ〻なるべ〻かくゑんざ〻まハ事のこ後ゑ

ゑ〻あひ〻ぐ〻〻されども日本紀とある後書紀のこふをあ〻ぐ〻ぶべて国史を日本紀といひあ〻へるやうにいたれ〻ハ事ぐ〻実ふもちるあるべ〻ぞあ〻ぐ也

る〻この論もうゑ〻ゑるゑあ〻ぶまこ〻ふハいぐあ〻ん例の人〻ぶあてよ〻さて

かく日本紀の沙局と法けゑるふても世よ人のぐ名つけゑんあ〻りを

おもへべし。其他ものがたりの

時世のありさまの事

此物語をよまんよりまづ先附世のありさまをよく心ひろくまへ並べ。極ぶれば事のさまいろ〳〵違ふすがたあり。後世のかんがへにおもひ惑ふるすがたをかくべし。時世とは此物語作者の立世をいふ。家七論にいへるごとく。この物語作者は一條院の帝の御代の事なり。此家七論にいへるごとく。この物語は一條院の御代長保の末寛弘の始。紫式部寡にして里に住まる間よみかきてなるものなり。大ぶ違ふまじくおぼゆるに。物語のさまは。昔の世よりの事のやうよりは出のぶまてるものゝ。さべての事にあらさるはなし。世よりありしものの記まて出まてるものとかんがへられば。作者の立世にかゝはらさるまて。なほべきことゝ多くあらさるをとつぐいたんは。先我大御國の上古。神武天皇大和の橿原に大宮を建て。天下をもろ〳〵めぐる時。神代あゝ

御制度のまゝに。何事をもおきて給へりとかんがへるにその制度にありさまを。大ぶ今世の御制度にちかく。朝廷に仕へまるを伴造といひ。諸國まて地を給へるを國造といひ。ゆのく生まあゝらに。其家を継其職をも継て。幾世ふれども遷り変らるはなかりしを。上古政迹考によれば。推古天皇乃御世に。かゝる〳〵の冠位儀禮にさまを摸し。郡縣の制度を摸しゆひ。後にそのさまいろ〳〵変りて。大ぶめるこゝぶ。ぞなりにける。今格式此書をよみてもるべし。そのあるやうは。日本を六十餘國と制め。國の下に郡を置。郡の下に郷を置。郷の下に村を置て。おのく〳〵吏をさだめ。朝廷にはかりつゝの官位を制めゝ。萬の事を掌る所を置まて。各其吏をさだめ。その官につきく位の階あり。又その官位につきく位田職田とて官位の禄あり。かくて朝廷にまちく仕奉る人には。其官位を賜りて。次第に高き階にも昇りやくるにまて。官位は人の一世ぶりにて。家を世に

て八傳へぬ御制度なりにまた國々の司八京より出て年を限りてこれを移ろひ替りつゝ國を治めゝることあれ共いまも受領なり郡領より已下の吏八大くその國より造縣主などのなりてもありと見てゝるこまも年限をゝきくんされども元来その所に住さる人あまゝ八後よハ世々職を継ぎさるあり さゝバいと卑しき吏あゞくも威権八こゝのあるなどゝ思ひありしく大くかゝのごとき制度ハありしうど我皇國八神世よりこれうこ氏姓を重くし家系をいひて貴き賤きを分つ國風なりしうば その御制度八御制度としてやうゝようつらひあれつゝ此一條院天皇ハ御世のゆゑどあゞよりて八其職に任ぜらるべき家くも大くこゝ定ゝらるゝごとくなまろしくさても官位八一世だりの制あるうしふ其位ハつゝる禄もまこと一世うぎりあるうしくさゝバ世嗣のうゝる時あゞよハいゝく困ぜべきゝあるよ私ハ田あゞ買て家のゝうれときゝれる是を庄園あゞらハ今世ハも某庄といふ名のゆゝふ遠きるハ其人の庄とあゝ所ハく皆私の領所れ跡なり源氏君の須磨八宮の宮沿あゞも その領所めれくハ其くゝるハ光景ありしうバ帝の御子とまうせども さるべ紀沙汰見あゞどのあゝざるハいと貧しくして人ぞあれさゝあるもおゝゝ半常陸介の姫君宮沿の八ゆあゞどの沙汰ゝてゝ人べし さて官位ハ昇るゝとも先ゝ家ハ生るゝ人八その父祖れ庇陰ハようく 最初よりさるべ紀官位ハもつれあるまゝど地下といふより下ざゝある人八さやうの憑もあゝざまバ其時ゝハ権威ある人の家ハ私ハんゝせ仕へて其労をあく朝廷ハつゝるまつるべ紀種子として官位をも申給ふ後ゝまでも其家の庇陰よりて高紀階ゝも昇ゝ申ゝ事あり紀されバ朝廷の御臣とも拉威ある家のかゝともゝ知まゝさゝある人ども多ゝ 此地位のうちハても事本の紀伊守夕顔の惟光などやうの人皆ちゝこれ上古ハ

も今世にも絶てあることなきなどバ、その勢ひいとゝ矣なる事どもなり。
人民おくべ〜まゝ住所のゝ〜も左京右京のうちに定まる宅地を賜ふやう
ふいたゝきなどゝ歩数法などのさ法ふてハ、ちゝ厳うある事ともゆえに富栄え
ゝる人などハ、己が家よまゝせても宅地を買とり、或ハ人に譲り、又貴〜く
なることバ貴なども せゝる。他〜当ふもたゝきバ、大くゝハこゝにも勢ひよ
まゝ せ家ふまゝをて、何處へも移りゆきゝ事とそおぼゆる。さるハ公卿よ
りをれる人〜ハ、世の代る例などハさるべき人もあゝざきバいと流落ることゝ
なるものなりて、栄ひのさ法よりてハいとゝ多くもよろゝ〜にたよりさぶ
べくゝまゝバ、おのづゝからやうふハなることもうゝ〜まゝて婦人などハ、さな
ざ法ふ浮まゝ溺ひて、所縁ふつたつくさゝぬ人の妻ふなる類もありとた
ゆることかの宮除夕新などのさ法ふてそふべ〜。さて又いと上古ハ氏姓
の系を結ふ事ゝ せゝ〜なりゝ〜ゝバ皇后ハ立まふハ大くゝ皇子の

系ふおとゝ〜まゝるを、後ふハやゝ〜うつろひゝく、大臣の法女なども、皇后
ふ立たふまもいでたて、皇子などハ産まゝるまゝバ法外戚ぐるもその法
ゆうよつたて、上ある位ふも昇ることゝ〜ぬ公卿の法女ども
も女御更衣よ結ふハうゆひく、宮子ふうゝまゝるまゝバ同じく法義母の
いでくることゝあゝ〜ゝバいづまもゝく、息女をいたゝきたてゝ仕り
出〜ゝゝんとせゝれゝゝ。當時のなゝ〜ゝるゝ、桐壺更衣の法父按
察大納言のきゝゝまゝ〜やう、明石入道のかゝゝれるゝひつゝゝゝし
事などゝ〜ん〜ゝ知るべ〜。こゝまゝゝ今世ふハをゝ〜なたるすゝまゝば、
いとおのひの外あるゝどもおやゝ〜。さて又夫婦のなゝ〜ひなどのゝゝ
上古よりれなどゝうまて、ゝどよりゝる縁ふのゝまゝる世ゝゝこれハ女妻かれハ
側室などゝきゝやうに名をつくるゝゝぶゝざゝりきゝゝハたゝりしまゝ
ゝゝまゝバ女たる人のゝゝゝへよ、本妻とおゝ〜たる人の二人までもゝたるもあり。

まつ妻とも妾とも云まつまた數ひあるべきもあつてさ海ぐなるこゝろこれ
今世のわろうざ海の婚礼はさ海ハいとくゆ矣あり。そのあるやうをうつぐ
いとで。物語ちまた化一生ともおもふてうるぞとく。同じ位ぞ。そまてようわし
づ上下の分ハあるまでも。相偶ひてよろしくたがの家ハ。妾あるとゆめて。
こゝろふつけたくみをやりて。そなたすのまま。なれよ一あ　なのごと考へ。
家れよう一あるどもをもんてくいみじくくんようのくるハ。公ざまをこゝして
ひとぶるハいひよう。又媒をこのこゝてもんをこゝたぐふつひよハ半とげて
かゝひてあ。後よハあゝよ女のうこへゆたて位ぞもこゝるを。そ女の父母おど
おゆゝてもよたなどの半あるまバ初ハちゝぶ。ぶ保しゝておすゝて初たぞハこの
婚ハ對面こゝる數ひもあり。或ハまつこゝ男のゝようのハぬをバ。ゆ出こゝとやゞて
制こゝるもあり。又いとんよかゝるよハ。そ女よみのゝゝのなどをこゝへてく
せるどもこゝることありたさまバみをおるぞうたる半ハ大ちさ位のつむ

こゝもあくそのこゝたくしなどのめぞこゝるまバなりくいみじくいひそや
して。悪ぞることなりこゝさ海ハ。帝よ奏聞こゝる世くの撰集ぶざる。その
ぶどもぶ作者のゝをとあゝハ一かれこゝるかどゝてこゝふべ一かゝるなくちー
なりしろバまゝまよハ案外ある半どめいでくめまでこゝまさこゝも名分を
出てくいひさぞあゝる妻妾といふまもあゝひバ大ちこのゝハいこゞた
曲事とハおもふぬさぬなりしく出たくぶたかゝしぶまゝていとゝ下ざぬ
よハさこゝハさ海ぐくなるゝもありくめ。今世のわろうざ海の婚礼とゝ
うこゞふめるまゝ。且かの國れ後世の理學れ海ぶゞゆゝひゝるゝようゝ考ふれ
バいとくくゝひよくゝぬ半のこゝて。彼がいくゝる淫奔の風世よ海で上下
おゝるぞく不義ゝぬハなくとこゝていくめ。然までもこゝれハ今世のゝてさる
半おこゝるひくくバこゝてあゝめこゝ世よハこゝれすおこゝちこゝ世の夫婦の道な
ゝうゝうば誰一人ひぞこゝおりくこゝとハなゝうゝくいひこゝても。往今の俗

ハあやまりそいひとく人ハ恥おもてぞうなるたかの夏也氷を抱くも
半ごひをてなりハぬるを見やて路にたゝみなぞう〳〵されども又男女のか
ゝひの正しうしるハ今のさほうとるをく矣るて男女つのよさいめんも
とつるハおく止事をなぞうてあるるのあんゐも踈き人ハ貧子わざるよ
のゞ〳〵せゞや〳〵親しれも簾を隔るうへふ几帳をうてそへ或ハ障子を隔
るゆゞうおどまてあひても行あきらゞぞうもたづうたるとおのつう
兄弟なども異腹あるたなかこのぢやうゆてあゝハよ面をゐもるを和さう
ゐ一生者の人よ今世のさほうを見をうるんよハ伝ことうぞんいてみぞうゞは
しく恥をちゝめ風俗とているめさゞバ昔ハ昔今ハ今皇國ハ皇國
めゝうゝハめゝうゝとうて世のあるさゞを嫌ひあやしふべゝうゞを
行のゞゞ我皇國ハ氏姓のすぢを重くとる國俗なるゞバ男女の縁もあるう
よ生ゐ見ゐ〳〵さ事ゝうゞひるハふさハぬ事なるゞバいふ妄なるゞバとく

あやゝくやうゝうゞひるる者の女などを生ゐ人の側よをづくるるゞと
ハ昔ハをさゝくたるうゝるさ又事理をめくいるゞ男ぞまゞ女の家ふ通ひ
て妻問をゞきことふて見も初ゝぬ女を先ゞ男の家ふむゝくるなどもうゝ
うへなることゝされバゆゝうゝふも親迎などいるゞぎの見てるハかゞゞう
けることを必へるなるべゝすゞて男女のこちハかゝみよ相愛てあゝべゐ
ことゝうあゞバやも初ゝぬ人をおやもぞくのひめくあゞぐちふゝめて
きて行ゝすうるるなどハ天地のおのづゝうなることゆうるゝねバ世るの
世よハをゞりしなるべゝ又媒といるものをゐるのさゞ人ハぜさなどよく
見初るる女房などゝて女も他のいひよくうゝぬ人などゝうちゝて志の
せちふるよゝをいひちゝをる事なりしハ人のゐをやぶゝぬゞとゝ
いをあなふゞゝと名ゝるる人の媒ゝて世和ゝと嚴ふいひ契まる事ハ
ゝゞ一生のゝゞひるく男も女も正ゐ世のあゐひとなるるもあるをおのひ

くべて考ふべし。大うさのあるこハ。時の事とせども。ちゝぐらぬ女をあるがち
ゝ小めさるゝさほふハあるべし。相愛の事ハ。藤壺の中宮をめさるまでゝ。不
朱雀院の事ハ。秋ぬゆゝかゝひうけ。えらる事あるをゝ見て。知べし。光ゆ
むらづゝハ。ものゝなどハ。陪ふかゝこゝハ事のごとくなるまでゝ。そもこ
情をさだぶるなゝハ。あゝらぶ。うちゝハ。ものゝあゝハよ。答めること
などもなくゝて。すぐゝあるこゝとやゝ。こゝまでゝハあるうふなるべるこゝ
事ふかあるまでゝ。人の妻妾と。をまる女を。おゝくもちく。奪ひとゝ。あるこゝの
王どもゞうゝ。よくゝべて。皇國のなゝひゝまさるを。知べし。大うさこゝれゝ
の事どもハ。ゆゝ世ハさほとハいとく。速へる事あるゝふゆゝつぬ。世ハこゝま
をゝんゞて。我國ハ禮儀もちゝぬ。夷狄のゆゝおぐゝ。ゆゝいあるまでゝ。それ。皆
ゆゝこゝのゆゝをゝくゝなゝひゝるふて。國ゝおゝゝなゝゝれ。失ること
とをゝもちゝぬゝこゝぐゝさひゝんといふべし。その中ゆも上よいへる。天下お

御制度などハ。我皇國のふゝるゝべ。皆ゆゝこゝのゝを撰さまゝること。
又この男女ハおゝゝひのさゆハ。ちゝゆゝこゝざほを撰ゝゆゝるゝこゝゆ。
ゝど。ゆゝ。ゆゝゆゝゝれなゝゝもゝゝあるる事。又今世の法制度ハ。大うさ孝德
天皇のゆゝ世よりあゝゝれ。我國ぶほの御制度ゆゝること。又今の夫婦ハ
ものゝなゝこゝを。ゆゝひゝ。ゆゝふべし。ゆゝいゝ。
ゆゝれゝるゝども。ゆゝるゝまでゝ。ゝハ又別ある事ゆゝいへまバ。こゝよハ。ゆゝまゝ。ゝぐ
世。ゆゝ法をよゝむ人のいつゝもゝいゝゝゝむゝるゝども。ゆゝイよゝ上よいゝるゝゆゝれ
ゝこゝゆまバ。ゆゝゝゝゆゝゝを示ゝゝゝこゝよゝゝ。ゝ時世のさゆを。ゝ
得てゝうゝゝゝべゝゝ。然ゆ氏の源氏外傳よいゝゝゝ。ゝゝゝ。ゝ代よく
ゝると。後世よりゝるゝハお達のゝゝゝ。ゝ世よハ治世ゝ事と。ゝゝ。
その世ハ凶事どもをゝゝあゝゝ。一ゝよゝゝゝゝゝゝ記をゝんまバ。治世の
なゝれやゝゝ。又戦國の記をゝんまバ。朝夕軍ありていそゝゝれやゝゝれども。

世間実用の学問やうにて、却て障あるものゝといへり。源氏も一生好色の人にやうよんゆきどもさありてハ人の交りもなりがたかるべし。古へのまろをとんるふハまろのなもひやりうるべし。といつて、まことにさることなるべくこそかゝげつらおのも学ふいへゝく、昔の書どもをよむふハ、たゞきやうありて、それいまゞ國史まゝ律令格式の書などハ、大ようゝろにたるすをバ用意して記し、又その人を知もむる法などをのゝ記さまゝるなれバ、こゝまことをよめバ、何事もいみじくゆえて、さのゝ〳〵に深く行たれることのやうふたがゆるを、此物徂さゝぬもの世ゝのうちとけ云の物徂かどゝ仮名まゞバおもひの外ふゝゞるるのどめ多し。さる條どもを彼此よもゝ考へて、やせゝのあるさゝを推て知べし。すべて昔の書を使て学問をするハむかしの時世のあるやうを考へて、今世よもてゝゝ用みて益あるべきものゝなかざりふんハいとづゝある

ものゝよふ漢学をする人などかの出れ経書といふ物をのゝ学ふ人あるひて、彼國ハ行ものゝすべてうゞ〳〵しく見ひらる國のごとしといふまでもてゝおとゝけ云うにたる書ものゝをゝ人まゞバいとゝくあやゝしくうるに兄事も多くして、かの経書ゝく法令教訓の書ふいへるやうあるものゝさまゞ〳〵行されることとハ昔よりさゝふなにたるいとよく知ども、世事ハ物ふ道理を考るあふ中ゝふ行ぢけるるふり情あるにあるゝもゝ起もしさゝ世ハよく人ゝもゝゞあるさまゞ何事の書を使んゆもひとあるふ世ゝ人ことゞよ泥むゝるゝく人情のあるゆゝ事ゝを使くゞ思ひさるりて、世ゝのさゝ世をさとるべし。中昔のゆゞれあるさゝを知るふハ、此物徂ゞゞハ世ふよるゝ〳〵に書ものゝまゞバ彼ゝ〳〵に書ものゝふ人今をゝく世ゝのふりを考へべし。これなん学問のむゝとあるべき事ゝ明らかなる。

此物徂称号の事

舊注どもいづれの抄にも。此物語古来称誉之事といふ條(クダリ)ありてむかし
よりの人々の誉(ホメ)られたることどもを記されたり。然れども皆ことごとしかくこそ
ばかりのことにて。まことにふかくいみじくおもしろきも稀(マレ)なれば。玉の小
櫛にいひもらしたるよしのみぞ。此物語のさまにいとよくかなへるは。いさゝかここに
引いでゝよむ人の心得べくなん。小櫛に云ば。これらの物語すべてのものの中に此物語
そことにすぐれてめでたき物にして。大かたさきにも後にもたぐひなきまで
こまやかに書なされたる物語どもは。作者もさしも深く心をいれて書ける
ともみえで。たゞ一わたりにて。あるはめづらかに興あることをむねとし。
おどろかしきさまのみ多くなどして。いづれも物のあはれなるす
ぢなどはしもこまやかにふかくはあらず。又これより後れたるどもは。狭衣
などは。何事も此物語のさまをまねびて。心をいれて書たりとは見え
ゆるものから。なほこよなくおとりて。ことわりもみだれたるなりけり。此

物語ぞ。こよなくて。猶に深くよろづに心をいれて書る物にして。すべての
文詞のめでたきことはさらにもいはず。よにふる人のありさま。春夏
秋冬。をりをりの空のけしき。木草のうつりかはりなどまで。すべてかた
ざまめでたき中にも。男女その人々のけはひ心ばせを。おのおのことに
書わけて。ほめたるさまなども。皆その人々のけはひ心ばへにかなひて。
一トやうならず。よく分れて。うつゝの人にあひ見るごとく。おしはからるゝ
など。おぼろげの筆のおよぶべきさまにあらず。さて又よろづ
よりもめでたきことは。まづかのなどは。よにたぐひなきことわりのも。
世の人の情にふれて。見るものきくものにつけて。とりどりの事を
のみこそあれ。いとおもしろく深きものぞ。すべて人の心といふものは。かくぞ
に出るごとくに。はかなきなる物には。あはれ深く思ひとるかなるにあ
らはれて。いとやかにとぐくしくめでしくみじまあひて。さばかり

ぐてくさまぐのことはやうる拙あるに世話俗語ハ世ちるくぐくしきくまぐくまでのこるうさなくいともくてもくまのこまのに書あるこるる。くもりあに続ふうつてむうひさんぐてくまて大うさ人の情ある
やうをうけるさまハやまとのうこいうこ人今ものさに和もこぐへべき
ふふハあしじとそはぐやる又さべて老ここの中ふめづくしくおどろくしく。
見さむるやうのすハをきくなくてもでやうをそうまでこでよのつ
神のなぐこうある事の同じやうなるすぐ故のこいひくいとそに和ふこ
なまこどもよむふうるさくわぐやるるあくうむことハなうくくきで
世ぐに和やうしくのこぐそはぐやるう。おのきをちくみどもれてあふさやく
よりは拙俗語をよみとに和てきうすること。あまこうくりふなりぬるとおびじ
するどもハうぐどうり書こくぬぐふ説ふうむんもまでるまこまこハさくも
あぐに和書ふて年月をこれどもいさこうもうむんいでこびぐこうびごとに

そぐあてよみこくむこうもちくてめづくくおうくくのこおだやるふ
もいみぐくさぐまてるおぐハちくまてめくそぐめでこくなん。とい
ぐまこうまこふ物語のごとに和書ふなんまこうる。その中やもぐふいそまこ
るやうに人のくれうちふろうことのくまぐくを出あくくるハいみぐく
いふある港文ふもこうおくまこりてあぐしこう今このあるを案ふよ。浮
文ふはぐてこうをはといふ拙あに和こくふ。ものくんぐくなど和いとく委
くくいひきハめんこハおろこうなるぐこうこさまぐもそうぐ
ぐこふ義を含くこるあくよ上ものある拙あぐハ字の外ふ俗語あるごとく
ようてめでこくゆやうこうあまこぐこさぐてハいこある自他天人ふこち未来
なぐこのようをきハやうにいひふつこうあるさぐしていこうありくうある拙ふ
世事ハ別ふいひふる拙あまこバこ
ふくぐたくこをあげつらふこと。こうひ稗史小説あぐいふ動こうこもくんふうあ
なぐハ拙あくくこうこぐのひうこふを他こう語ぐこうる。ぐこに和仲のあと

なまとり、こまとり、ぬこのみどりなどあり、家毛の文もあり、まるなるも皆こゝ事のさまなるをのこきんとりてゝ心をこめてするものなりねど、必物語のごと書くめでたしさまざまなり、さまざまの物語のこゝ。源氏物語もまされる事ぶこの物語とすべき物語なくゝ。ぞ物もやまとの物語いとゝ〳〵今ゆくさまなるも比類(タグヒ)なしなるふなんみえる。

此物語の分れ事

玉小櫛よ云すべて物語の分れ事伊勢物語などのハ歌りくハ古今なまびよりなどゞ書きなし作りぬゝのあゝふよみこゝろとかゞゝきハよりこゝ。中ふハえもいこゝでこゝろなもあり。その外れ古なし作り物語ども大うこゝ分ハこゝるこゝろ。物語ふ此源氏の物語なるハみれ作りぬゝのよりなるふこゝろこゝさハをこゝくこんてゝ。みみよりゝ〳〵此中ふすゞれこゝるもちゞまこゝり。分ハ源氏なるよりハ狭衣ぞよりゝ〳〵きといふ人もあまゞ。

物語ゝ。さゞこゝものもおゝれ古物語どもの分ふくゝぶれバぞふこゝれくこゝりゝ〳〵こまゝゞ。源氏のこゝりまさまるこゝハ物語。こゝそまこゝる。こまゝもあゝれる詳なる後近世の分こゝみどもハうけあ人ぬも分くあゝく。こゝやかゝやゞないひこまゝれこゝふよりて。中孤篇の分をこゝ人作こゝる。やこゝふいこゝもあるこゝみゞこゝひゞこゝこゝそこゝハ此物語の中ある分どものさ女一ツの件(ヲダ)あゝくハ代集などの件とハいこゝこゝかこゝりこゝる所もあゝる。ちこゝこゝろこゝふ物語集の詞をまゞこゝよむをいこゝゞきこゝゞのやこゝよこゝ。こまゝ不新古今集れこゝゝべなゞ後こゝこゝこゝこゝて。風歌ありなゞいふ歌の中行ハまこゝる。中こゝをゞくゝよハ今俗(ヨノヒト)のこゝゞふこゝひいふこゝこゝよこゝちこゝ。いゝゝゞ。中をこゝいひてこゝこゝびんよこゝ〳〵ひこゝる。分なゞもあゝて。おのゝ〳〵こゝて生る私説(ワタクシゴト)をれゝ言んとてこゝる説(コト)をもいふゞゞて。ものゞきこゝこゝハこゝれいふゝ人の分何を源もこゝゞゝ〳〵ゞ。物語流なゞこゝもこゝゞうこゝゞゞこゝりのゞ。こゝんこゝるのこゝふて。

いひもらぬ味ひあるものをこそ上ぬるふさとびんよろひなどぞ〳〵へく。
妄(ミダリ)に評ずるものこそ所詮まことをふけ和語の哥は大らか一つの体(スガタ)あるもれ
うう。又ものひさまれよりはあるべきことぞ。古へぶりなる行ひ後のさまなるありきすく
なるあり。さてみなるありて。杉のくさ人のさまぐ〳〵にわらへるるれば。
あろ〳〵の体一つとしてはふ〳〵ざることなし。そぞ中にも巧(タクミ)なると僻(ニホヒ)歌
あるとはいひもらぬまで生てみよわひ行もあり。又その一つ〳〵体とい
も。そこのさまふりて。艶(アトサキ)の文字詞ふるかせて。ひびきあるさまよ。頼れ
らる方ふよりつの。歌集どもよ。一首(ヒトクタ)づくさおちて。著るとハ物のづら
差(ケダ)ものして。一つの体あるやうふ方ゆゆるなるまでどもさべてハ別(コト)ふ行ゆ〳〵体
あるふたのびたる様ならぬ。りよ方ひとりてこそ。称(ホメ)るさまをさへ。
つるれやうふいひもらぬめるたいとあぢれなくうふ〳〵いとれるあり。
此物語のうちよ方のうたを論ぜられること後のひるをもれて。方といふ

ものすべてれさまをもたるべく。又作者あ一の方ふらう〳〵しうもし
ねどもをもいひ弁ふべ。さて又本居翁の方ハ此物語のこもるべ中巻の比れ
方のさまをいとよく学びとられうるあれふて。さまおぼ〳〵おどろ〳〵
きふりあどハこそてあれ方ふふとんてもどく〳〵うぬやうあもれゆ
ゆまどよく〳〵味ひ考ふまバ。ふよくうつ〳〵とられる所ありて。古人の
ふりようるるものこそべて近世よりれ方とていふをきひぞ。ぞ一ふ〳〵あや
〳〵紀事を考へ出て。物のあはまもちぬ人の耳よげざ〳〵とつぬきて。ぞふと
杉ぐ世べさまものことはるを上ゆとハするれやうなまどてまてる
このぞ物れさとびんの方めよてあまこ。実(ホン)ふ本として学ぶ所の古の方に
似ることんよハ今俗の耳ふハ疎(ウト)るべさことわりあまバ。もろかどる紀さまふいと
まるんハ中〳〵いまへの体(スガタ)ふ上れなるべ。かやこのの八物いとまもわ〳〵
きるりろまどびれ物語よあづる事あもあ〳〵ぶれバてふハ畧(ハブ)きつ。安藤氏が

世ゝの歌論ともいへども、物語のうち、和歌あるべき詞ども、万葉古今伊勢物語のごとき外、とりあつめの古体をそなへたるもの、やさしくもあはれなるふてやさしくもあはれなるふうを作りなしたるを、ざれむまことふやまとごころの上なるものなり。といへども、いまの物語の書どもをよくよんで、めでるひとの論ハ、皆もるかくあんみるべきなり。又玉小櫛に云、物語源氏君をたゞめて、よれる人とてこれる人の事ハ、いのちもめでゝ、ものさまふかめゝるふ、そのよみあるべきハ、かめるる所一つをなくして、ゝ人の他事よりよれるよりあはせて、ものハ、ものやうふいへる事のゝ、ところ〳〵ふんこるそハ、物語の中れ人〳〵の寄ハ、みなぼゝ式部こゝろよあるなるまゝハ、かむれバるまゝぼゝなるなるあゝこゝ。こゝよ物ども多く挙られるもを今ハ略く。みふ作りめ〳〵の、卑下れんちゝひまくいへる詞どもある所、むゝよりそこゝ心つるゝ人おゝて、ゝぎまことふその方れよりゝぬやうよめゝ注をゝまゝ

るハいかゝよそやゝとありゝまゝ又云、おかれおくべれるゝ、小櫛よ又云、おかよむべれんどゝをちゝむと形ゝバ、此物語をつゝふよくんべゝ、此物ゝるふをるゝ事ども、人〳〵のちるゝざんぞへハおとゝ〳〵ゝ、ものよむべきこゝ物ぞへこゝろいふなるいふといふよまゝづ人の情ハ、古人ゝるゝ、みゝれみゝゝるゝれ物とハいへども、そ中ふ時代のあゝひ方れ行どゝあゝ、おの事ゝ〳〵世中ふ作きて、いさゝかそれるゝところもなれよあゝゝ、かゝて、ものも情のあゝ感ぜるよう。よみ出るゝざなまゝだいゝ〳〵今ゝれみゝゝれゝゝるべきことわりあゝゝも、上つ代てそあまゝ事むゝ、ものよりもあるこの方ハしもあゝゝ、今ゝよんをのゝ、者れまふよみいゝるもあゝゝいゝ〳〵れ方後まのよびて、こゝ和もむれふよむゝゝざなまゝだいゝ〳〵への世れゝるゝ、人のこゝろゝゝへもあゝざゝをよくゝゝでハゝれゝあゝゝゝざゝ又いゝ〳〵へをまゝ移ゝといふ中ふも、まゝふ系よりゝあゝゝこの八、世あゝゝ事とゝくゝゝてその作まいゝくゝあふゝれゝ。

さしおきて、わかりて古今集よりこなたをまづ見べしとあるに、そのよしは
歌どもハ、みなむげにいやしきものにもあらねど、されバ古への
歌をよむにつけてハ、中の世より上ざまなる人の心ことばぞその世中
をもしらでハかなハぬことなるを、今の世にしてそのまゝにしるべきあ
よハ、この物語を見るにまさることなし。いにしへの人のしわざ、歌を見てのみ
にてハ、その歌いでたる本の心みえずして、やうをしらざるなれバ、まことに
其時のありさまを、此物語を眼前によく見るなれバ、源氏君をはじめ
じかにてよき人々のありさまをとりあつめて、みやびたる人々のまじらひ
またいかにもすべてひとつをも見て、その物語をきくがごとくにて、それ
しわざになるまで、そのしるしまでこまかに見しるなり。又そのしかみなやの上の
ありさまを、思ひのわかきやうす、やむことなき家々の内々の事どもまで、雅
なる事どもを今のうつゝに見るがごとくなれバ、いにしへ人の

歌の出来る本の有さまなどもよくしられて、やがて其歌どもの時〳〵の時よ出
きて、其の歌をよむ人のこゝろハ、しらるゝものとやうふくぞしくしら
るゝわざぞかし。さる故に此物語に出たる歌ども、人々の心ざまにぞ
ことごとく歌よむべきさまなるぞとハいへ、さて此物語をつねによみ
て、此物語の中なる人々の世中になりて、歌よむときハ、おのづから古への雅び
やかなる情のうつりて、俗の人の情とハちがふにまさりて、同じ月花を見
る猿もこよなくあはれ深かるべし。「さる故近き世の人ハ、古への歌をまなぶ
とハいへども、古への人の世中ハしらで、その情にうとくして、ただおのが今の
心にまかせてよむ故に、古へにはひく鄙しげなることのまじりいでくる
ぞかし」といはれたる、ここに実にいはれたる説にて、歌よむ人の心得
あるべきわざなれバ、事の因に引出る也。物語ハかゝるやうに心をとゞめて
いまゝ見ればこそ、ひろくみて知るべし。猶そのこの段をも又古へのひがことをいひて。

なぐさまるおもあるまじくぐしくなまじひごとよハ暗きつゝ、ものの哀びざまを論へる事の中より引出て、著く每人のこゝろをつゝしむべし。

作者の用意

紫家七論に云、凡才徳ともに備ふるハ、丈夫世にかゝる事まれなれ、まして女子ハ大和もろこしいにも稀なるべし。こゝに紫式部ハ源氏物語を論ずる人、皆ゝ紫式部ハ英才をのゝ称して、其實徳をいとゞ、物語のかきもあつまりぐゝ、式部ハ歌あり、為章つゝ物語とむかしの記日記と成よりして、其事実を考ふるに、其事実をとり、其事実を人もなく、才徳兼備の賢婦なり。先物語のうへにおいて、ひとつふたつをいとゞ、紫上のらくしくおもひとるあるあらんにおもひとりて用ゐふかくぬんの上ハ、ものゝ記ハ、ものゝ花ハ、花ハ里のあの移ゝみをび、薄雪のきさきのあやまちをくいて、ものゝ人ハ、朝顔の斎院ハふかく名をとゝしみまる。

むかしのうへハ云よく人のけさうをのゞ、絵角の男ハ父子の道戒を守りるあど、桜ゝの婦徳を記し、はゝ永宮よ、あゞまる成ものゝ、けさくなるをすゝめ、ものゝ警戒をもあゝしるもの、ものゝ式部ゞんの記てなりといへども、これむゝ物語よ書るゆゑ、みづからかゝとゞてをあハさゞれバよむ人も皆ゞ他のゝるれやうにのゝおりへ、こゝとへバ本人の欲ハ、偃師ゞ立ものゝ成ものゝゞるゞゝ云ゝ。といふ。此末は日記を月のでゝ[illegible]オ徳の[illegible]

いつゝ、女性をもとゝべし。まゝ玉小櫛ハ云、紫式部ゞんゞ人ハ、物語とかの日記とをもて考ふるに、女の学問ゞてゝ、ものゝ人よりも思ふ成ゞと、深く用ゐるゝ所ゝ、ふかてゝ、帝まゝ、ふすゞも人よりも思ふ成ゞと、深く用ゐるゝ所ゝ、ふかてゝ、帝まゝ、ふすゞて男も女もものゝ人ゝとのゝ、いとまゝ、ものゝ人ゝをも、一つ二つのゝハすゞゞてべくもんあゞるゝ。といふまでの詞ゞ、こゞゝ成学問ゞてをゝくてゞぬん成ものゝ成ものゝ成ものゝ、ものゝハ女といふもゝ、ものゝ、ものゝ

みゝあもとすることゞもんよをうるべしとのるハ女とてもさゞらりのるもて
ものとよりあまてもみべきことあまゝバそまてよぼうるべしとさゞふあゝゞとい
ひくゝゞうゝほうるゝあれことをちゝせうるゝ又因まふふたうせのむすあ此
米を式部巫ゞ作うゝうるを思うちもむうゝ此ゞ此をゝく
あるゝ作へるよゝかうるゝ此女のやうをかむうふるにさバうゝあゝくいよ
べ此ゞハ見てゞる紙紙式部みづうゝ学問ゞてをゝくむんをんさえよ
おとさうふゝみゞゝくゝうきるのやうにいひなゝるのゝ又をとあの也
よゝ大学察の家此ゝるまひ方ハひあいひあゞをいとゝもあやしゞふ出るも
一與あゞうゝ日ゞとうあてゝ学問をる者の優あゝぬよゝ後おとさうよ
いみゞくいひあせるゝ作るハよの人此たなゝひさゝべて行るゞゝもゝのゞぬゝ
ゝふとゝむすぢのゝをバ拙まめゞうくよ此さゝ人ふいひなうさんとするゝゞゝ
なるふゝみづうゝことふ学問をぬゝあゞうゝかゝうてうくようゝぬさあよいる

米ゞもあるハ人ふとゝあるぬうゝ此んちゝひゞゞみうる。といそまてう。ゞふ
物説ゞもふいそまうるゞゝく物語の中ある人ゝのふゞゝ又せうるふつ此うう
よゝ此あゝ此うゞあゞゝハ皆ことゞゝく作りあゝ此用意(コロシテ)あるゝバ今さうよ
ゝうよハ評ゞゞ。その像(ノタリ)ゞとにふをふうあてあゞうゝひゝんあゞまさゝく作者(ツクリスシ)ふ
ふ用意のやうをゝうゞゞとにのふくいうゞ此米ゞもふきゞう。

物語のゝゞゞ人并物のあゝれを初るといふ事

むゝ小柳ゝ云大うゝ物ゞゝうハ世中よりうとあるゝ此ゝすゝ此ゝ。めゞゝ
き米。おうゝ此ゝ。おゝりゝうき米。あゝまゝあうゝのさ海ゞゝを出あゝうて。
そのさ海を作ゝうもう此ゝまゞゞゝなゞゝて。つまゞゝあるゝゞのあてあてび
ふゝ。又ふのむすゞゝまゝゝふの行もうゝさうゝあゞのなゞゝさあわもし。
世中のうるやゝうをもふ作ゝふのあゝをゝをゝうるものゝ。といそまうう。
物語といふまうをんるやゝうハゞゝよゝうゞかゝるものふなんあうゝるゝそこの源氏

物語ハいろゐるゝふてはくまるといふことの本ゐハ螢巻ふ源氏君とむらさきの君との物語のうれ問答の中に仮名ものがたりとあるくまあゝハされる後むかし小説よりも出てきをはきれらうこまもとふよりも考ふて作り物語の名をさがゞふゝんとゝぞふこのうへ世まもんなうわる作者の書ゝ紀さ子ハかの書と見てもるべくおのゞかゝゞゝなる学者よ小説の流をまゞへて治せまバ今有きつ。さて又物語の中よりよりあゝ紀などいへるものつゐれ儒佛の書ふ以善悪是非ふ問ゞうゝゞゝゞ人の情よりあゝとゝ物語ふて物の情を写すをよりとゝ。ちゝゐをあゝとゝうるゐもふ小説ふくもくいさまるれバ必ずるゞゝこの中れすぢを初ざまバ物語見ても中源さんゞゝをもるふよりなゝ。実ふこの物れあれを初るといふの物語ぶこのむかとある事ハこの本居先生ゞさゞあてんいゞく書ゝく説述ら事てるふていとゝくゝんとよめゞゝ紀考ふなんゐるるさまバ小説の二ハ表ハ大うる物のあれのすを

のゝ解（トキ）のべらまてうう今ゝ流を引出ていんよハいとゝく事もくるるをて其要（ソムネ）とある所を抜（トリ）ていゝくうゝふかゝげつ。ゝゝくハ年書を見て初ゞゝ。さてその説ハ中よりあゝ紀といふ言の中をゝくとて。ゐれハ見る物きゝ物ふゝ事ふ人の歎ゞて出る歎息（ナゲキ）のあゝふて。今の俗言（ヨノコトバ）ゆもあゝといひ紀れといふ見ゝ。あゝんバ月花を見て歎ゞてあゝんるすをぢゃゝさまよハ見れなどいふあれといふゝ出あゝとゝれとの事ありうるものふて。漢文ふ嗚呼ゞある。ゞゝをあゝとよむも色あり。といゝさまてるハいうゝゞゝやもゞゞゝその点ハ物よ歎ゞてあゝといへるゝ古今ゝゞゝゝゝゝ紀をゝれといへるとふをゝく物よもゝんてゞるふ今の俗（ヨノコト）云ゆもゝさるとなゝ。ゝゝくハ伊勢見ゝうの方ゝゞゝゝゝいとゝふ紀ゞゝじさまバゝゞあゝまといふゝて歎息の声とのゝゝんるべきゝ出ふの流ハもゞていゝゝゝゝゝ小説よ云人ハ行るふまゝ感ゞゞ紀年ふあゝうゝて歎ゞべきゝゝゝをもゝく感ゞて

作者ふの言れ物語の作ふハレとふゝこあれと今ゝとハ別あり又西国ゝて八物ふ発ふ紀ゝて八テサテ云々とふゝゝ東国の人ハサテとやうふ以俗流もあるゝゝゝゝれ年ふ月ふゝゝくハ物ふもん

べき事にふれても。心うごかず感ずることなきを。物のあはれしらずといひ。
心なき人とはいふぞかし。心ある人は。感ずべき事にはおのづから感ぜ
でハえあらぬ也。さもあらぬハ。何とも思ひわくことなくて。感ずべ
き事をしらねバぞかし。此物語ハよく人の感ずべき事のかぎりを
さまぐかきあらはして。それを見る物の。まづおのれやげにとおもはるゝ
おもしろく。いとあはれなるかぎりを書けり。又春夏秋冬をり〳〵の花
鳥月雪なども。をりしけるに出あひたる物ごとにおど
ごとし。ある事にても思ふことある時ぞ。時につけての木草
のうへも。いひしらずとも。人の心をとう
・然るを此次に此物語の中なる詞ども皆委く引出されど今ハ省く
おのが考へはその書に委しくいふべし。そもそも紫式部が本意とふかく此物の心をしる紙むねとハ
しておもしろくいふあはれとさしても。いとゞ文をも志りそふる事ひ
のあるも。おもしろく思ひよりてある事のすぢにふれて。かなしく

あはなるやうにあはれとや思ふさまなる事ならバ人にハ深く思ひしりてそのよ
きあしき事ども思ひくらべて。解りしらるべき事なれバすぢもあること。上の件に引出
しるしつるのちどもを考へわたしてしるべし。こゝにぞ此物語の大むねなり
けるにて。それは似もつかぬ也。みづからすゞしく深く物のあはれをしれる人の
世中にありとある事のさまをよく見て人のしわざを見るには
情けきゝにつけなるに情をそれ〴〵の様をよく見しりて感ずることの多
かるが。其のうちにむすぼゝれて心のびてハやすくこゝろえぬふしぐさもそれ
作者もその人のうへにかゝせて。くはしく書顕して。物のよしあしを。
いふとも。いふまでもなき事どもをもあやにくにあらはせいひそせくいふをかくんを
めでしる物にして。よの中の物のあはれのかぎりハ。此物語にのこること
なしはてゝ。事によむ人の心に。さまざまと深く感ぜしめんためなり。
何事もあはれと深くいみじくおもはるゝべかりければ此物語をよみて。

学式部などあひく、ものあるわかの人れ込へるいぶ人を淫るをぐ川くやメり
ひとく、又抽後の中ゝ考へるよりあ、きく人のきるぶんのおもむ化をよく
考へられバ、ちろ、このおを見ぶきる時そがやうよ学ちろ、のの考ふ
ひろ、ちる時の学ちぶやうなるものよ化人れきるぶんバかやゝなるもの
わろ化人いうやゝ、ものゝやうにすべて学中のきる抽なべて人のいれおく
のくまぐまでいとよくきゝれて、おのゝ抽日化ま人ちてがゝぶこふいて
ゆる人情世態ふるく通ぜんこと、野抽後をよむふちくものあゝじとぞおぼ
ゆ。已上小梅 廣道云、この論まことふさることふて、作りぬ、のきる化いをんとかし
ゝんぶごとゝ、こまよつ化ていそまり化すのひるもぶべて古今学問といふ
ことする人きくふこで書籍ふきる事をのゝ後あゝひて今の現ち眼前ふあ
ることをべさゝもゝどゝゝびひさすゝ理といふまをきぶて、作るもくこの
理よ、ゝあてうあへんときることとよそもゝ学問といふまふ古のさを学ぶも。

ひとゝ、古のひろさ抽をきりてそまふこべて、おのゝ生ちなどの世中
乃あるさ抽をもまやう事の成るべきやゝをもふひめぐゝさんゝあるる
べ化をかの理といふものの作りゝてるのゝふてもて今日の見化あるさ抽ふ
されぐゝかるひるるのハおゝてきろ学ぶびるゝぶと作ゆも学ぶ化あひ
ひるるのハなる化もあさきろを強てを理ふるのへんとていさ抽ぐ賢ぶり
ゝる行ひぶどゝて必もあゝぬるぶどもを作るかゝるぞなゝいでく頑
固ふるふるまひきる作みぶりゝこていらゝとも学べ大ろ化世人ようこれバ
いゝもゝあやゝこゝ作さゝびゝる事ふるをりてさそゝハ学ぶまるる人ハ
家をも方ともを失ふものゝやうふさへいひゝらあるハいとあぢ化ふくふう化
ひとぶふなんあるぶ作ふハいとやる人情世態よ通ずるゝの学問といふとの
抽よあゝぶる花ぶうゝさきバ抽後ぶゝの影をみるく人の情化ゝ化ゝく
をなぶりのゝく知ゝあて世中のあるやゝをもさとり、さてふまあ化

書籍どもを読バ、一巻よみて一巻のかひあんべしと、いひなかられべし。ぐふ
そのうちれさあみどもハ文此物語よるてうるめハはうしざうなり。菅宮木孝庸
といひし人ハ主君なる秀吉法印に世間の便になるべき書ハ何をか専一と
んられ侍らんと問しかバ源氏物語と答へゝまゐらせしとぞ。おしくハかゝるうつしん
事どもをやゝ心ひのくべからんこまりてしかいと心をまゐりし事どもあれどそ
まさも、さらに別巻によいふべし。さて又玉の小櫛に云。人の情の感ずる事よ
まさるハなし。されバ物のあはれのふかく志のびがたきすぢハ殊にこひよ
多くして、神代より世々の哥にも恋すぢをよめるぞ殊にわりなくしく。
んふかくすぐれたると恋の歌なで多かりける。又今の世の俗山がつなどのうた
ふ歌などいふまでも、恋の歌なるが多かるも、おのづからしかる事なりて。
人の情まことにしくて恋につけてハ、その心さまに志てさがひてうたふことゝ
かゝれ此事も、うしめしきすぢもえらぶしきことゝも、おうしなるもう

まつれにかりもあるまじきにて、さはぐまじき人のあはれ感ずるすぢハ、おほかた
恋の中にやりがしうりがくて、此物語ハ、よの中の物のあはれのかぎり
を書あつめて、よむ人に深く感ぜしめんと作れる物なるに、此恋のす
ぢならでハ、人の情のさまざまとこまかなるさま、物のあはれのすぐれ
て深きところの味ハ、ゆくしふりがたき故に、殊にこの恋のすぢを多く
物して、恋せる人のさまざまに情をまでなきてかざりなめどかぐにあへ
まさる趣を、いともこまやかにかきあらはして、物のあはれを深く
して見せたり。後の世なれど、俊成三位の恋せずハ人ハ心もなからまし
まし、物のあはれもこれよりぞしるとあるなどぞ、物語の本意によくあた
まりぬる云く。慶忠云こゝに此物語の中なるあはれの深く志のびがたきなども引出されど俊れもおく。上件の文どもにあやしき此
んやとられなどうけがさる。葵巻の詞 忍ひかへしげへどもえもしのびかねて 夕霧巻の詞 など
あるをみて、此さの物のあはれの深くえんなるは、ほ志るべし。さまで此

すぢよつけてハさるまじとあやまちをも引いでことゝうふてむるふる
まひもおのづからうちまじるるだおく源氏君のうへまで宇治君の事
徒月報君のゝ蔡壺中のゝあどのごとく意の中もさやうのこ
とおくいるみぢなるすぢふハ今一きハのあハまれふたすある故ふ
おとさゝふさあゝぬ意をも出却く世あひごのふたいたれをたん世
るものゝ云ることいそまてゝ（此次よりのものゝ引用略く中出をたゞし此編もいとみどく笑し）
ゝう。そもく意あどいふるハゝも。今俗のゝまてハ皆いそまる淫奔放蕩
不義非禮の事をさゝてのゝいふことおごとふふゝめどそまハ皆儒佛の
教ふ再おまておろふひあゝくるものふてあれ。実小男女のなゝひと。
天地（アメツチ）の祥れおのづからゝなり出ゝくるさふゝてさゝふ人の力ゝて樂（トガ）む
べきものおゝあゝび生（キ）とゝいけるものゝぎゝ。この世さゝぬもあゝぎる
ハこまふふゝて次ゝふ子孫（コドモ）をうまふゝてゆく。世中の軌（キ）とまてあれば。

然まてもさバゝふいひくいさめびしもいつバこまてよゝて自ひもおこゝ。
世のこぶまてともなるべきあまバ。おどゝふふまをおきて。おかやけより
ゝ偶（タグ）ふべさやうを宮あ立ものこまやどてゝ世の大道ゝて。法（モノ）人のふを
ちさびひく所の規則（ノリ）なり。さまバ梅枝まふ源氏君の名男君を義塗
しゝふ人などふも意のうさふてみられるゝ。いゝく樂（イマ）めおへうこれ
人世のさあまバなりされどもその方ゝ法（ノリ）令の書をとゝあて。万の
教誡の書ふ載（セ）まバ半つたゝう。物語ぶゝハ世中のよたもあゝたも
とりあつあて。真情（コヽロ）のまゝにかゝうあてゆくものなまバさる義誡ハ義誡と
して。おのづゝ情（コヽロ）のひくゝれさりぐゝたゝをあゝそれを主（ネ）とゝく。
さる義誡ハかゝゝぬなまバさるふしてんるべたく。物語を書よりの道ど
もふ意のすぢ立るをいゝく和（ワ）で。或ハ勧善懲悪といひ。或ハ好色の樂（イマシメ）誡
あどさすゝのるゝをいそまゝる。ハ皆儒佛の書ゝ例をもて物語をゝんれ

るひごとなるよりも又玉小櫛よ委く弁へらまてられバ彼書をよんで知べし。
そ論の志ゝ所ゝ云ゝ所のくあてまを見をんをと他まる物語を教誡ふとう
なるほたゝあとゝへバ花をよんとゝく種おゝる樹の本伐(キリ)ぐてして薪(タキギ)ふ
ちゝこんぐごとゝ菊ハ一日もなゝくてハえあゝびをちなる物語まバ
そまをわろたまハのゝねど薪よハよ紀本どものわろふあるさあるふ
なゝこ樹をきゝとゝんハゆゝよんゝ紀ちるぐごとゝでいふべきあほ
いとゝ儒佛の教とハおゝむさうゝてゝあまを物のゝ道をちゝ紀と
いゝとゝ伐ゝ一ひろんなバ分をゝるさあ志をも困をも泊むべき道ふ
もゝゝゝぬべたゝ人のおやれ子を物ゝふんちゝぐ伐あゝれと思ひちゝ
バ不孝(フケウ)のゝハよふあるまゝく民のいゝつ紀奴(ヤツ)の法とそをあゝれと思ひ
ちゝんよハよふ不仁のゝハあるまゝ紀を不仁ある君不孝ある子もよふ
あゝちいひてゆけバのくあてまを志ゝ絵バぞゝ。されバ物語ハ

物の道をまをを見せるふみぞといふものをさとりてそまをむゝと
しゝて見る時ハ物のづゝゝ教誡よなるべ紀ことハよゝ紀ふゆゝゝりて行ハ
うるべきをちゝめより教誡のまるぞとゝ紀ゝ見るゝんよハ中ゝの物
ぞとあひでありぬべき。といされゝゝりゝ紀論ふて今まで
のちうさくどもふゝけてもいされぬ事なる伐此義ぞそゝめて見出ゝ
まゝゝるふていとおむゝしくめでゝゝ紀るゝつけても玉小櫛ハ此物語
の注釈どゝ紀中よ一まハぬけ出ゝる書なるを知べし。

一部大事といふ事

紫家七論よ一部大事と標(シル)しゝる條(スジ)ありていとく冷泉院の御事或ハ
法ゝ物語なりふゝく沙汰をゝるゝなるまといひ或ハ子細あるゝ事と
ちゝさゝ小品を秘ゝ或ハ此題向の見ふ紀まて一部の物語ゝりてゝふん
まふゝゝうゝむゝとゝもゝゝも法ゝ小品式部ゝ年ゝをちゝぐる

ものといふべし。為章試小人の業をもつて識者の是非をまち給ふべし。

とて、相臺書房より次々、序文を乞ひ、序文などの語ども引て、物のまぎれの事を論じて、伊勢物語より二條后、後撰集より京極御息所、栄花物語より花山院、こまごまのはづかしくんぞせおもうぶべしとて、私の初ざとふあびきこうなるべしさんどはいとひまつてものまぎれをはぶいてえざるこ。

とて、かつこう北楚の遠王晋の元帝などゞ事を引出く云られ他の遠北事まてさんかようぶいとんや朝廷ハ皇祇のさづけさせ給ひよりぶ万世一系さふまぎれまふことあれものこすの世ふも女御更衣のうちにゐぶせ物もうぬうちまぶまて帝系のまぎれもいでれぬべしやと、をくおもひたるうしぬ。況喩を見まバ式部ハ女なまどもを生質の美と学問のちうとうちあひく識見ものづゝ大儒のさよひとつといふべし。又業大臣のるハ天道好還の理をもあらはるる

おのむ北羅大臣ゞ業小同じ。羅大臣ゞ業とハ上ニ晋帝を論じ給ふ鶴林玉露の文ゆるあるを今ハそぶれたり年出をとるべし。此一件ゞ一級の大事まつて、謙ぜる人の名得あるべきこと。といひまゝ或問をまうけく答へく云る事の中に皇胤御一代まくも生原氏藤原氏ゞぶふまぶ

きあんハ吾國の御為めのうれるふして東海をふむ魯仲連ありぬべしさるを藤壺ハ源氏の母ひく冷泉院をうこうふハ誤ありまぶ北いやまちまつて源氏ハ流の邪事といくども皇胤のまぎれおもぶぶなるうたあゝゞ相臺書房ハ御為ハ正ゝく子なり孫あり神武天皇の御血脈なり伊勢宗廟を祀をうけまひ天下の蒼生をもまりぶをいぶぶ北なるべしとまふす程ハ泉流の御後をすて朱雀院を正統ふうへをるたいとも叢キビしき業ふあゝゞやそもく一且人倫の乱あると長く皇胤のまぎれうとなるべしや断案をくゞじゞし

といへども原下北さまくいそぶ源氏の邪をもゝぶるまつて皇胤のおも

さぬうくあゝぬをよろこぶべし。式部が主意如しさうるべし。さるめふ用意
ふるに式部が當時宮中ふも披露する物語よんだなくして書べしや。
此作を諷諭よんつるせるひくいろゆもくめのまぎれをあらうめふせず
せるべし。よろせびたうこどもたるなるたのぬべしゝ云。とて。ゆくもちく
論じてもべく諷諭とんでこそ。物をを玉ふ梅よ。又こゝ成論じて云。冷泉院
のりよくまぎまを諷諭ふとうて。一部の大事ことして。そのうを論じこるも。
なく儒者ごろまして。ひさすとりろこのふみどもれ例ふのこもづみく。
物後のこころをもこぐるものゝ。その論ゆ中よ源氏君と藤壺中宮とれ
密ゆをもてめよいともやさゝれさ多ふるたゝ。終りよいとおそろしく
ゆくまでれあやまちなりそ。ところくる氣象をんよといひて。ひ
て諷諭ふをんとこゝれども。されふも論をを引ていへるごく。源氏君
此事を後よいとおそろしくあるまでうゆくる事とおもひたろ物ひ

なぐこゝ。中後もなく。藤月殿君よ多びくゝ逢ひひ八伝とういちん。
ゆ一後藤中宮の此事をいとおそろしゝれあやまちありとこゝ多
るんゆこゝ。中後よかるゆをまるふ書べしやゆ。ゆこて諷諭ゆ
むよ八。一事びいゆ。あゆこゝ。又立うてゆこもるふでなりぬべき。
又みをつこゝの事ふいそく。當代のかく位ようひひぬることを。ひの
ごとうれゝとおぐれ。注こゝ八源氏君のゆゞせるふて。當代こ八冷泉院れ
此事ゝ」ゆかの論れごくくなるんよ八源氏君冷泉院の位ようたき
ゆくふつれて八いよくおそろしくゝ。ひて。皇胤のゆ。ぬるゆを
欲さゆくるさ論よてて出べくゆ。かやうよひのごとうゆこゝとおぐれゆ
ど八書べきゆのゝ八なほこのあれ事のぐゆこのゆれ伝ども。あゝぬこと
こゝゆまでも。かゝこれすぐれ事なゆこゝ。ゆ八ふとれ舟へいもしつ。ゆふくふ
此事ゝ。ゆれこく諷諭といふべれふもあゝぐそもくけあのゆぐれ八古今

なかくびあれ太平記などあまたあれど。物語ハ物語なれバ。さる世の中みだれたることヽ
一類のものとして出べきものあらず。さてまても物語にてハ。かく物語の中に
一つの事をのぞきたる。但しバ此らのハいふなるゆゑにて事なきぞといふよしまづ落
つぎの中なる世の中の事ハ。上下もいへず。心の物のあはれのかぎりと深く
きこえんつくしてかきむらめぞ。そハ男も女もよろしきのかぎりをとりて
深くよろこびにすぐれて。物のあはれをしらしむるぞもの情へといひ。
文などよみにくるほかなるひとの心にハ。猶に今一きハあさましの
ふかきとある物なるをことよしにかれくはるまじきにあらず
事なる心を此古方の人をも出て。かぐく物のあはれ深かるべきかぎり
をとりあつめるものぞかし。さて冷泉院のもはくまぎれハ。源氏君の
栄花をきハめんためにあるぞ。そハのうるいかさまの物語にも。むねとして
よきさ為にいふ人のぞ。その人氏をいふとてハ。よにあまりよなきの状

えらばのめでいふ中に。身のさかえハ人の世にはよりのうへのかぎりなれバ。人
の世のたふときにいたりて。つひにこの人なる身となりぬる事などをいはで。物語
此多くの冷泉にて。此物語も源氏君の栄えをきはめてかくんとするに。人の
さかえのきハまりハ帝の御位にして。執政太臣といへどもなほ人はなほ
あるきぬところなる院に太上天皇の尊号をかうふらしめんとするに。さる
べきよしなくてハかなひがたくて。まてとに浅からぬはゞかりあるめる事に。
帝の御父とせん料に。此物のまぎれハ出来めるぞ。そもく此君。帝の
御子にて臣と成給ふにおちゐつるうへに。帝の御父にてさへおはし
ましよし流めて太上天皇になり給へるがいとめでたくめでたき御
身の栄えハまさに人のかぎりなる。なほ此尊号かうふらしめん料といふ
あらしハ。藤壺の宮に。秋居の信わば物のまぎれをぞやゝよりしり居る
るがみるや。冷泉院へひとまるに奏きんとする時の何よいそく

ゆゝしきの大事と侍ることを思ひとり給へ院きさいの宮ゝでいま世をまつりごちまゝはゝそのはゝるあすべてうゝてよろゝぬるのみやゐ世侍らんかゝるおいわゝしの身うばゝあとひうまゝ侍らとも仏の御ゝいう侍らん仏天のたゞけあるふうて奏ゝ侍るなり。後さ云ふ事ゝふ泊ありてこの弁あれど長々まこ八今そふきつ。おの〻考ふおのそふいへべし。かゝて奏ゝふることゝ侍きこゝめゝしてみゝどの仏侍ふのゝまへるに仏よりてゝんよもゝですゝ記をまゝゝゞ後の世までれこゞ考えべうゝうるゝをそゝ。

〇注あり。なぶくかゝ文侍のゆせる詞よ天変ものさゝりふゝとゝ世中ちづゝるあゝぬハこのゝまたのうゝくゝよゝゞのゝ杉や北御世ゆうそゞまるふて侍るまゝまこゝ。

〇注あり。なぶくかゝて次の文よりゝくいよゝゝはがゝゝんをさせ給ひつゝゝく。一世の源氏文紙云大臣よりありて後ふさゝゝよみこゝもなり。位ふもつきゝうゝるもあまゝ例ありゝゝ人ゞゝれかゝゝ記よゝとよせてさゝやゆづゝ笑ゝまゝゝゝゞよゝゞゞふゞゞおゞゞゝる。秋のつゝさゝんゝゝよ。太政大臣ふゝり

〇思論

給ふべきことゝゝく。〇注あり。なぶくそもゝゝ世物のまぶれのゝ。さゝんぐゝの考よりつぎゝゝにいひ出ゝくゝゝよりゝて源氏君をゝ位ふつけ申ゝんとおゞしめゝよりうゝるゝゝろへおゝゝゝうる。次第のおゝむゝき紙よゝく考ふゞゝ。さて世王の第ゝをゝきゝうめて主ゝるむゝと給ゝゝゞ。今一きゞゝみゝゝめて帝の御位ふ侍ゝ申ゝるゞゝきを。太上天皇ふてやゝゝぬゝゝと。侍りぬゝの源氏公を侍ゝ申ゝゝるものゝゝゝそハ狭衣物語ふゝ大将をつひよ帝ゝゝゝる。世物語の源氏君をゝまゝびゝく。今一きゝゝすゝあて書ゝるものゝ侍ゝ紙。大将ゝ帝の位よつけゝゝるゝよりて。御ゝゝゝやゝまゝゝゝ侍ゝゝゞあゝて。そのゝゝゝれゝゝ。中ゝふ浅ゝゝふ少ゆゝゝを。紫式紙ハそゝ紙よゝく思ひゝゝるものふゝく。帝ゝ位をゞのゝて。太上天皇もゝのゝゝおゝくてハ。ゆゝりゝあゝ侍ふ。桐壺巻ゝゝ。ゝ侍ゝ人の相（サウ）ゝゝる御ふ。世物おやとなりゝく。帝王のかゝゝゝあゝ侍ふのゞゝるべゝ侍相ゝゝゝまゝ人のゝゝゝふて月日ハ。

みぐまとうれる事やあるむとちぐめよりまづまさぐまへをまうけ
れさてはあのまぐれをうけてかの〜ぐずの号を蒙り給ひでいうのそぬ
さはようけもてやきく落やまそふ物りては位よつけなるむと呼る事ふ。
此君の親ふ右院のはむざ〜あ戸〜さの法みさちの法弁にとうさきてた
ず〜そ〜あぐ〜っ位をあづ〜を給りんこと後ばあぐ〜あ〜よ〜ぐありよ
そ申。給るそめはんあ〜〜めて及ばぬきハまたのぐか給るんとあるこまと
帝のは位よのぐりまくべけるまでぐん。その一きハをぐこわさ〜ふのこ
きりといふはさうぬ〜のトんをぐ世る詞ふて。いそれ〜〜ふ元給り
ざ給く大うさはのまぐまをうけるそとハ。此源氏君の栄えをき
そそんこあくといふこと。上件のおりむきどもをかむうへてこるべ。
なくいそぐかの独衣ハおわうさ位のもはは位をきみびくすこ〜づく
年のさそをうへてきる弁に大将の女二宮ふきのびてをきりてうみ

給へるはうをさぐれるんの皇のふきのてまぐ〜ふ〜て後ふそのはよ
を宗ふあふきてなんといふざあはる射天照大伊邦の法告ふよりて。
はひよ此大和成位よつけうるハおそ〜は法華院のあはまぐきを
まびく出るあるをとてまもうれ大将を位よはけく栄えをき
そそんふんあること。此物ぐ〜ちと同ど給りぬ〜のさそ。さきバうれと
あてもこれをなぐ〜人出るべきこ。已上抄 とはれこう。此二つの海はぐきこ
よう〜むは給りあ〜のさそよ思へる事あまび後ようあ〜きそそてて。
さ〜ふいべさよ〜ハあれのこう。既ふかる海ども此世界へハ。ぐふ
もこの〜で。ちのまぐこうふむひをもはさこうふ記〜つべ〜。さて此二つの
論のうちふのれハまづて安藤氏のいへるうそ〜ようん〜とで物がある。
さるてかの七論のうれぐ海ハ小梯よいそれるごとく全く儒者云よ〜
て。源氏の例をもきめて論ぐこうる物よハあまで。給りぬ〜のこうれそ。

いまてう訓諭めたるものもあるよりしもあるまじかなり。
その所ハ此物語よりのさたぐくの物語も字のうまでど帝の御妻ふものく
まうだまありて。そこに弁ようもまのくるほとをも御信よりつけなりうて
などいつまハ絶てあく。大うさ此物語ぞたづめあるべしを。但し人の妻の御
もうりとぞうまバそれくよハさる
こともあるくらハもぐもさハぐおれく。法くの事の情をおして案ふよ。作り
の左世のたどよりう。此物語ぞたもくこの帝よ流布しるさはかの日記よ
まうまくたてれバ人ふもかつぐんをれんがどもれうさてそうくもん
て流布まうまんよハ法ひよ帝もの空作もんのふべき物あるふかくめづらに
かくこれすぢをかまてうること。いとくもさたがしそきまうまくく
のごとく。他ぐ氏くの世といふよりのべて拙れよあぞくへても当のぐべた
をもどぐ伊国ハ祈代よりさうるのたくまきバいづまの御時まうとハかけまども。
まうまくくうどぐ世のやまあまをつくくうる物なるまバ世ととひ嵯峨天皇

よ准へ醍醐天皇ふ擬へなりくうるものもあるまじ時のみうどれ御先祖よませバ。
むくいの恐さもぞうあうべし。そこも此源ぎの御制度ありくせよハ。
仏事もようびわりくふなようびうそきハくくく咎めのふなどの事は
あるぞくく時ハあまでどたひよハ帝もこそなハさん物のかくあるまどた
事どもをかのふく用さいうくくの法まうびかまうるふてれもへぞ。
人の恐よりうるものどもハがあくくなるべくさるハ安家氏のいくるやくある
云なりくくうていきてあてハいひどけまでど大うさ此一條のくハ訓諭めた
て学ある中のもかの物語れ物のまぞれハやきくくを物語をあくくるふて。
そのうろむひとれハまてうる御説の物語よりて因果を覿面よんをうる物
なりう。まうまでんまうけぞくくとハかぞうて。深く世どうてりんんへのふ
まうせつ。作る訓諭あきうる事まくくを。人情のもくまくよ
うたまぞくハくうるこまやうて。作りめくのさうて。女の議論どまくたを

はかあるなかなかなかりけれど。此巻ハ桐壺巻に。世の人光る君ときこえ申すさ
かゞやく日の宮と申すとあ。ゑ。伏案の文じやと見えてゐるに。その二つを對（ムカ）へ
置かることハ此物のまぎれの事。物がたりの中の大むねとある所に。
外作（ホカ）の事どもハ皆ことをまぎらハさんとて。よ。あやなしける物のやう
にさん人。ゆめゆめさまにバ此巻の事ハ。作りぬしの心ありし事とみん
ればゆるぞハいちなりしことを知るよう。今實（マコト）にハ深事ぎりたるふる所
思ひていへんハうしこれまでなきバ。此の事も又その論をバさゞめつゞよく
見ん人ハよく見てよくさとるべく覚んさてかりやうに見る時ハ。小櫛の説
ハいらぬ事をかゞくとふ弁へいそく。まづ源氏君が此の事を後にハいと恐
ろしくあるまじき事と思ひしりたまひながら。外に後にも又朧月夜君に
忍びく逢ひしハ何といいへん。ここと。いへ事てるごとくをりハまことに
よさるまじきなことどもあれするハ。ち情を弁らして物のあはれをむねとしける。

物語ぶみの作（スガタ）にしてあるまじき事のよしおもひしらずながらあやにわが
作る事をもまうせるみたいにてのどめだちにひたへる統あまりバこれをもてハ論
きべからず。安藤氏のいへることハ。げにもつきづきしある儒者ごとゆえへんれバ。
おそろしくあるまじくもひかふとあるのことをもて。諷諭といへるハ今めき
あらぬことなれバ。それを辨へらむるハおとるうなれどかくいひつゝめ
てハこれもまた議論といふべきさはなぞゆゑある。すべて諷諭といふものハ。
その事とさしあてゝいふ議論のごとくにハあらで。ことに作りぬしの心の
底にのみ秘（ヒメ）おくものなれバ。これを其の巻にハしるしおかど
いふ其々の例などをもていふべきものなれば。しかしきりつぶくとさだか
に跡（アト）あるものなれバ。諷諭とハいふべくもあらぬぞ。又そんなさせんにあの人に
[illegible]
やうにまぎらして。その事をはからず諷諭のなりしとはいふまじきバ今とありては。

いよ〳〵智ある事なれば、生世のさはりとなる事ぐらいとなるべし。ひとりぬ〳〵の
人をおしてかうもやとおもふんぞ。この訓諭といふことの見やうなりとぞ。
事ども、此物語の中より拾ひぬ。一のことを挟くていへるなりとこゝろ
会をして考ふるに、大ことちゝまるとかくるほどせてさとしるるは、
そもそもよかるべき事よりはあるべきてう。総まづ物語のんぞ
へをとりけるあるよ。その人ぬうへとてあるものまゝにいひいづるものとてなるべき
よりもあるにも世をふる人のけうさすれんるあもあるべきくふもあま
る事の後世ふもいひつゝへさせまゝりにふるべくをんこゝろんげとして。
いひあさぞめくるなり。とあるあどは物語のすべてれさはをいへるれ
ばこゝまでの浅はかもいづべくやさてまゝ小粉よみをとりてのまそふ当代
めかく位ようるひ拾ひぬることに成ぬひのごとうまゝとおびんどあるをも
引いづくいそまてる事もまるあどひは大ゝられ人情のくるつたてまるふ

がとべたさはのるを書るなるまゝば。況よすべた事よりあゝば。又骨亂の
まぎれぬることに成ぬ人るさすみてまるべくれといそまゝられどもろ
かゝだやゞて浅論が面〳〵くなりていたある勧善懲悪などの体なるべし。
訓諭と勧善懲悪とは。やすぢ是あるるなるを。大ゝ一つのやうに。
ゆゝくるあていそまてるはゞかの儒者をやぶんとての見ばなる
べゝまでといまする。細〳〵ぶるふ似るもの。さて又物語はあれど。
さる世中の大事を。一段の大事とゝて出べきよりはあゝばゝくといそまし
るもいづ。おのゝはゝくふさる世中のちまれるあよ。一段の物語はあるる
ものやゝふおゞやるゝさるはあゞ〳〵物語どもはさせるふもあゝ拾ばいそまし
るやゝふ。一段のちまなどを立べきるはあゝばれど。此物語は一ふやう
うちゝるふ。此物のまぎれのるだりはいくめゞゝなるるあておいまで
の物語どもれ俗をりていべきるとはおゞるべゝまゝ訓諭あどいるるは。

大かた儒者さへにハあなれど、此作ハぬし〳〵なかし漢籍をよまぬ人なればこそ
あしめ、すでに文法なども漢文に似たる所ありてなじ〳〵拙法とハいふよしなく
かきけるにて、見ぐるしぞ。なほかたちに彼になしける人ハあるまじ。さるときも
それとハ定めがたくや、あらん。されどこれハかの諷諭のうへにひとへにひが
んにもあらんかし。かくに燈(アカシ)なき論なれバ、よひていふべくもあらじ。さて文
のとかにとかくるあれがちなるあひだの意にハ、諸に今一きハあはれの
ぬかれたるとある物なるなどにこそさるまじくといひきこゆるハ一つのさる
ことに似たれど、それても筆がしにてよるべし。かく皇胤のまぎれぬだに
あるをもしらでてすなほなるとも物のあはれのふかきとハいへども
あらんを漢文に此法なるのうへにしもかしこきかなふかくなるまじの
にならずかなしいまだ定法の事くなどハ、かくあるおしき筆のうたがひ
をたかくしての物どもあはれのきはなることハ今もそらしまさりて

関やうなりても、おのれのうたがひハあながちに上なき法ならずくのことなれ
でと侍りぬしの心なくばこそてみきんもやまさるべくなんさてまた
源氏君の栄えとききとめ、さかゆるときのこともいふまでさるとうもハ諸に
いかなるやゆゑにかく人の栄えをきくハまた常の法位にして、執政大臣とい
へども其づ人ハなかれあらぬ位ならず、さくといふこれまでどこそれをもまた
筆がしによるべきぞ、そもし他(ヒト)の国迄常なども、ならバこそ常の法文とせん
料になどこそまらせても、かくべきままハかの藤壺まて冷泉院の帝
の先例をかんがへさせまふところにも、かのころにハあしかれども志れび
てとみづかからきこゆれどおほかたの里、日本にハさしもに法院ど
うるさきものなし。たとひあしんにても、やらふにあのびきんとすれバ
いかでかうつさへするやうのたがひんとする。とあるごとく、家法国ハ神代より
うじたかき法くてなる代いかに空言(ツラゴト)拙法なりとバとてかくおほけなき

年のかゝるべゝやとまよくんぢるに人なきだにてかくさはふいへるハ
あまさへばいよ〳〵ことゝよあるよ似てかの栄のきゝみをかんとく
執政大臣などふもはしうとも、そのかゝんやうふて栄のきゝみとハゆ
めべゝまでぞ何のあらぬことゝハあゝんよりや帝のゆ位ふのゆりまふ
ふりみまとも、かゝあるまゞ紀ゆ年のゆゑなゝでと、よゆりまのべき
やゝふふいてゝもあるべゝ、ゆる成かゝ物そゝ〳〵紀年のあふく太上
天皇のゝ号ゆかゝるやうにゆ紀ふ〳〵るハ子細あるべき事なりゝ〳〵
さてまゝ落ゆ年ふ教居の信ゆ紀ゆすを帝へ奏する所の語どもを引て
ゆる号かゝふゝめゆゝん料とといのゆ紀とせゝれるハゆふゆ科とハ
ゆんえゝまでどこれよりてゝゆ栄ゝをきハめんゝゆんの料のゝとハゆえ
ゆゆさゝまゆバゆ語を注ゝゝまゝるおもしの紀も年文のゝとゝハ吳ゆるやうゝ
おのれゆ考ハかの考ふいひくゝそゝよ件の伝を弁ふるとゆるべし出一條を

すべて源氏君の栄えをきゝあんゝあの料とといのゝまつまでさバうゝ
よハゆて出ゆ源氏君の栄紀ゆさゝりハ藤ゆ出ゆ奏ふて伝すもみゆ中の
まゝふなりゝるさゆふうゆて栄のゆゝゝふゆゝゝる年どものゝてを抜び
さて太上天皇ふ准へゆるをいひゆ次ゆ六條院へ行幸のゝあるこれ
で栄ゝのさゝりゆきゝみをかゝまゝる所とゆゆゆる次の紀栄ゆふ
四十の紀ゆ紀年のゆゆゝるも栄えのゝきゝみゆゝるハいまゆゆかのゆゝハ既ふ
女三宮の年よりゆゝゝの姫を言出ゆれるハ柏木のあれゆゆゆれの伏案よ
て表へむゝふ姫ゆゆゆゆゆゆハ衰へゆゝゝをかけるゆとゆるべしゝゝゝ
よりゆ女三宮のゝゆいでゆてゆひよ葉ゆ君ゆゆゆゆゆひ右衛門督うせゝひ
落ゆふゝの年あるまゆゆ落源氏君のゆんゝをゝるゝめゝふ年のゝゝあれバ
よゆゆゝゝゆ年よハあゝゆゆゝゆゆゆひよゆ紀年ふ出ゆ上のかゝゝゆ行へる
ゝゝゆ泥ゆ哀のゝゝゝみゆふ幻ゆゆハゆのゝゝひのゝゆゝゝゝゝゆゆゆバ

すべて源氏君のうへよ。栄えだうをかんと搖へ（カバ）ゝふハあゝざる事とも
ゞ〜〜〜源氏君の栄えをのゝ物をんとゝゝバかゝるゝゝきうゝこのゝす
をバたゞたて世上の事もゝ虎のうちふこゝ。物事のゝゞゞもことよく
のゞまゝうへるさゝふかゝゝべき事ゝあるを。かくあゝ見ゝこのゝすをもかゝるハゝふ
うれ物のまゞれ報應（ムクイ）を示きるものなるべゝ。さてつひよ源氏君の出世
栄ゝハ夕雲方大臣のうゝふゝでめ。桐壺帝の世まで朱雀院の世よのゝゝよ
宮ゝ。致仕大臣の末ハ紅梅大臣ふゝでめゝゝも。安夜氏ゞいへゞゝく。ゞり
めゝの用宮ゝゝゝなるべゝ。ちてまゝゝ左上天皇ふてやみぬゝゝ。
作ゝめゝの源ゝゝをつけゝるものゝとゝく。狭衣のゝを後ゝゝふ世
といゝまゝてゝるも。桐壺実のお人のゝもゝ。落ゝまゝれ思ゝ見のゝも。落ゝて
まゝてゝるゞゝゝふゝて。ゝゝもいゝべゝふゝなゝ。ゝゝゝまゝゝで栄ゝを
きゝゝゝんゝゝめのゝなるやゝふいゝれゝるゝゝうけゞゝゝ。ゝゝれ狭衣

を引て。かの方將を信ふつけゝる事よなゞゝへて。栄ゝをきハゝんゝゝん
おゝゝゝゝをもまゝゝやゝうよいゝをまゝてゝるもいゞゞゞふかの物語ハ世物語成
うつをゝるものゝふて。ゝゝ物をゝひゝる事ゝ勿論なれど。かのちれをつひよ信ふ
ゝゝゝゝるゝゝても。おゞゝゝゝゝ見を省（ハブ）きすゝてゝる。ゝゝゝぬゝのゝハもゝ見ハ
あゝゞゞゝゝ。ゝゝも〜〜氏姓（ウヂカバネ）を賜ゝゝゝとハ。御臣（ミヤツコ）とゝゝゝまゝゝる見もゝふ
まゝで。ゝゝゝび氏姓を給ひゝゝゝふゝゝびゝゝとゝゝて。大伴位を嗣（ツギ）ゝふ
べゝゝハあゝゝぬゝゝゝゝまゝでいゝゝゝも上つ代よハ絶てゝゝ見ゝゝゝゝゝる
を。後ふゝる例の出来ゝハゝゝるべ見ゝゝゝゝゝまゝゝでゝゝもゝゝゝ
世世のハゝゝゝ時の例なゝるを。ゝ例を例ゝゝていゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
物ゝゝゝゝふ。あれゝゝふかゝべゝゝゝゝゝゝある。世ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

世人はちゝびゝかつくるも。天照大神の御とうくんとすゝん。
狩衣の作者乃ゝをおもへるあゝて。大神の御告ふゝて。
大和を伊勢よつけゝるはゞふいとさるべきことゝるりふて。
の事。又冷泉院の法皇をゝちゝるなどゝ。ゝ同ゝゝきざゝとて
おゝゆるなれさまどかゝやゝの事ども。はゝたゝりぬゝの心ゝそゝる
あゝゝゝまゝて。誰ゝ人その実を知るゝたゝなるまゝバ。七論もむ小説も。
いゝづゝゝる論おちゝゝく。今かゝく雑へいゝあゝも。粉ゝゝ同ゝゝかゝまゝりゝご
とゝなるまゝバゝこゝまゝゝるまゝゝともふいゝゝづゝゝゝごゝとゝいゝべゝゝなゝん。後のゝゝん人おのゝ
ゝゝゝんゝゝふゝちゝゝびゝてゝゝゝり。孫ゝてまゝゝ此論どもをゝんてゝゝ。安藤氏ゝ説
をゝゝゝふとおゝゝゝゝん人おゝどゝあゝゝんゝゝよゝゝかゝの風俗のゝゝるをゝなゝゝゝもいゝゝんゝとゝてゝこゝの
俗ゝゝゝぬゝゝゝの伊勢ゝゝ国の事をゝゝゝゝ

青巻上終